

## 第4部

### 発展期における 学会活動

---

## 縦書きを横書きに ～ 会報 ～

杉山明子  
元NHK・元東京女子大学

縦書きの会報を横書きにする検討がいつ始まったのか、その記憶は定かでない。情報化の進展に伴って、行動計量を謳う学会にとっては、横文字、数式、図表のためにも、縦書きからの脱却は避けられぬことであった。

当時、会報の編集は、月例シンポジウムの開催、講習会の開催に並んで運営委員会の仕事の柱であった。会報第48号（1989年9月）に、第50号から会報の様子がえをすとの予告が載り、会員からの意見・提案を募り、題字についてもアイデア募集が始まっていた。この横書きを機に、編集を引き受けることになった。

いざ、横書きの作業を始めて、見本を集め、題字が出来てきても、統計数理研究所会議室での運営委員会では議論百出、結論が出ない。広尾の駅近くのコーヒーショップに場所を移して、長い時間話し合っ、水野欽司運営委員長のOKがやっと出たのを覚えている。

編集作業は、流行りのDTP（デスクトップ・パブリッシング）で行なうべく、ワープロ専用機文豪MINI 7HRを自宅に購入した。

そうこうするうちに、1990年4月30日に横書きの会報第50号が完成した。堅いイメージの学会報にあって、林知己夫の書になる題字「行動計量学会報」はユニークで、筆の運びに躍動感があり何ともいえぬ味わいと、とても好評であった。巻頭言に「行動計量学の資産を作ろう」池田央（立教大学）、それに第50回記念月例シンポジウムの報告から「行動計量学の今後の展開」上笹恒（筑波大学）、「行動計量学会の誕生とその後の経過」柳井晴夫（大学入試センター）を掲載した。横書きになったので、外国語の表記が楽になり、またグラフが挿入できた。ワープロ専用機のおかげで、文字サイズ、文字装飾が多用され紙面が華やかになった。

前任者の杉戸清樹（国立国語研究所）は第30号（1983年5月）から第49号（1990年3月）までの7年間20号分を編集されたが、私は第50号（1990年4月）から第55号（1992年1月）までの2年間6号分のみで、後任の市川雅教（東京外国語大学）にバトンタッチした。

その後、会報の内容が他学会情報や求人情報などに拡がり頁数が増え、広告も掲載するようになった。第89号（2001年6月）には、サイズをB5からA4へ変え、1回り大きくなった。

編者が変わり、体裁が改訂されるたびに気になるのは、題字の筆者名の所在である。どこにも入っていないのに気づき慌てたこともあった。今になって、題字「行動計量学会報」の横に「林知己夫」とサインして頂ければよかったのと思うことしきりである。（文中、氏名の敬称略）

[理事、第5代理事長、第18回大会委員長]

## 「事務局」1985-1988の思い出

岡 太 彬 訓

多摩大学大学院経営情報学研究所

1971年に、学士会館で行われた第2回行動計量学シンポジウムで発表したのが、行動計量学会との最初の接点でした。多次元尺度構成法やクラスター分析法などについての研究は、発表する場に余り恵まれなかったのですが、行動計量学シンポジウムに参加することができてからは、ようやく共通の興味をもつ方々と交流することができるようになり、たいへん嬉しく思いました。大会で何回か発表し、学会にも馴染んだ頃に、「事務局」を担当してはどうか、というお話がありました。まだ40歳を少し超えたところで、自分に務まるだろうかという不安や、事務局の仕事で時間が足りなくなり能力もない自分の研究がおろそかになるのではないかという不安もありましたが、それまで10年以上お世話になった学会であり、「学会は運営を支える人間がいるから動くのである」とのなかなか反論しにくいお話もあり、お引き受けしました。

庶務事務局担当理事が正式名でしょうか、通称「事務局」は1985年から1988年まで担当しました。勤務していた立教大学の住所の事務局のゴム印や事務局の封筒ができあがり、理事長印（角印）を前任者の岩坪秀一先生からお預かりして、いよいよ事務局担当ということで、3年間無事に務まるだろうかととても不安になりました。岩坪先生から受け継いだ事務局運営マニュアル（大変助かりました）を基に、電話でも色々教えていただいたのを懐かしく思い出します。現在の事務局と比べると、仕事の内容はともかく仕事の環境が今とは全く違っており、BIT-NETが海外との連絡に細々と使われ始めた頃で、理事会の出欠は往復葉書の返信の住所に事務局宛のゴム印を押して使いました。ワープロもようやく普及し始めた頃で、筆記もかなり使われていた記憶があります。表計算ソフトもまだ余り一般的ではなく、年度末といっても、実際は夏休み前の決算と予算では、電卓を使って会計書類を書きました。「事務局は決まった手順に乗らない仕事をうまく片付けなくてはいけない」というのが、事務局指南役ともいべき水野欽司先生の口癖で、事務局をお引き受けして全くその通りだと思いました。色々失敗もし、当時の理事長林知己夫先生はじめ皆様にはさまざまご迷惑をお掛けしましたが、どうやら3年の任期を全うすることができました。学会賞（当初は功績賞と優秀賞の2種類）の創設に携わったのが印象に残っています。監事の宮原守男先生からは、「会計監査ではここを見るべきなのだ」ということを教えて頂きました。学会を通じて、また、事務局の仕事を通じて、年齢や地域は異なっても研究の興味が同じ多くの方と知り合うことができました。これが、学会に入会して一番良かったことだと思っております。今後もこのような機会を期待して拙文の結びとします。

[理事、元事務局長、1999年度（第14回）功績賞受賞]

行動計量学会には「創立と同時に入会した」と云いたいところだが実際にその存在を知ったのは少し後である。何の躊躇もなく入会したのは我ながら不思議と思うのだが、学際的な学会であることと人間の行動が研究の対象であり、それを「計量的」すなわちコンピュータとも関連を保ちながら研究を進めるという主旨に共感を覚えたからである。人間の勤をたよりに推論するだけでは複雑に入り込んだ学際的な研究には納得のゆかないものが多く、やはり数量化を通して種々のモデルを駆使しながら分析を行ない、試行錯誤を繰り返してはじめて目的を達するものと思われる。ところで話が代るが、現在進行している第二次産業革命と呼ばれるものはエレクトロニクスの生んだ花形役者、コンピュータが中心的な役割を果たしている。それに伴うコミュニケーション方式や制御システムの飛躍的發展によってあらゆる分野にインパクトを与え産業構造から社会機構に至るまで大変革が行なわれ、2000年代は勿論、10年後の1990年代でさえその予測は非常に困難になってきている。さらにエレクトロニクス関連技術および光ファイバー通信等の新しい技術が次々と開発されこれらのハードウェアの発展とソフトウェアの発展とは密接な関係にあり、ソフト技術者はまた次々と新しい技術を考案している。この産業革命およびそれに伴う社会的変動は好むと好まざるに拘らず全人類を呑込んでしまうものと考えられ、予測される社会的な大変化としてはコンピュータダイジェスト12月号の記事（新コンピュータ革命）によると、中間管理職の消失傾向、ブルーカラーとホワイトカラーの差の減少、労働者の転職回数の増加、パートタイムの増加、等があげられるとある。しかしこのような社会的影響よりもっと恐ろしいと思われることはプライバシー・セキュリティの問題に代表されるように人間そのものが精神的苦痛等により破壊される心配があること、コンピューターセキュリティの問題に代表されるカテゴリー的な大事故やその恐怖から来るノイローゼ等人間自身の存在が危殆に瀕するおそれさえあること、である。

一番大きく変化するものとしてはあらゆるコミュニケーションの発展があげられる。そして我々はその恩恵に浴すると同時に情報過多とそのインサイト過多に悩むことになるだろう。電話嫌いやテレビ嫌いな人間が出てくるのは当然でありこれがますます増加するようになると思われる。あまりにも発達が速く革命的であるので、社会組織や人間関係にひずみがおこり破綻をきたすおそれがある。勿論人間には順応性があり、このような変化が徐々になれば、あるいは覚悟を決めておれば案外大丈夫なのかもしれないが、よほどの強靱な神経を必要とする。問題はいかにこれをコントロールして自分に必要な情報だけを取り入れるかであろう。そのシステムは各人または各企業によって異なり、そのニーズによってそのシステムを考えるべきである。これは非常に難しいことなのでプロのコンサルタントも必要になってくるだろう。

このような社会情勢において、行動計量学会の果たす役割はますます重大な段階に入ってきたものと思われ、学会に対する期待も甚だ大であるというべきではなからうか。

[会報23号 (1981) 巻頭言、当時：理事・北海道大学工学部、2006年逝去]

## 計量医学の要

駒 澤 勉

統計数理研究所に入所してからこの6月で21年になる。医学関係の分野の研究者との結びつきは入所後3年目の昭和37年であったと思う。現在の研究所の建物が出来る前で、大正時代の立派な木造の建物に間借りしていた頃である。脱線ついでにいうと、研究所の今の敷地は日本の国勢調査発祥の地である。昭和43年に総理府から文部省に移管されたが、当時、歴代の統計局長がなかなか移管の書類に印を押さなかったという。今思えば、担当局長としてはもっとものことであったろう。

話を本題に戻そう。近年の生物学・医学の発展には理工学分野の寄与が大きいことは周知の通りである。林知己夫先生が医学のデータ解析の研究に専念する糸口をつくって下さった昭和37年の秋に日本 ME 学会が発足した。ここに、理工学と医学とが結集し相互協力の学術・医療の本格的研究の発表の場が用意されるようになった。特に、情報処理の道具だでのコンピュータと統計数理の理論・方法論はこの分野での利用で急速な発展をみせてきた。ところで、現実問題として両分野の有機的な結合のためには、あまりにも強力な専門者意識の溝を埋める必要がある。現実には両分野の研究者の緊密な協力関係と不断的努力の結果、そのギャップが埋まっているが。

今では笑い話となるが、大動脈硬化の指標を作る目的の研究に協力した時のことである。大動脈の構築要素と脈波速度を重回帰した結果を病理学会でグループ発表した。その時、構築要素の大動脈の内膜・中膜の弾性繊維・膠原繊維・筋細胞の重みを数値で示した。その結果を聞いていたその道の大先生が、1とか9とか重みで硬化度を判定するとは何ごとぞ、と私達の研究を批判された。今から16、7年前のことである。今日ではその大先生の研究グループが多変量解析を取り入れている。

私が病理学会の発表にはじめて加わった時、医学研究者との接触も浅く、データの背後の現象を知ることなく統計解析を機械的に行っていた。一方、医学者の側では解析結果を鵜呑みにして消化不良のまま表現していたように思う。その後、研究生活を共にし（日本の医学研究者は昼間の診療・夜間の研究活動と実に精力的な人間だと思う）、時には酒を酌みかわしながら語らった。研究面の相互理解ができるまでに約3年の歳月がかかったと記憶している。

私の体験からいうと、ノウハウ的手法整備を含めて、データ解析の理論・方法論を開発する側は応用分野のデータに接し、データが手軽に得られるものではないことを知る必要がある。また、解析法を利用する側はデータさえ取ればあとは統計プログラムによってすばらしい結果が得られるなどと考えるはならない。データの背後のことをよく理論屋に知らしめて、どのようにデータ解析処理をすればよりよい結果が得られるか周到な分析計画が必要である。

この意味で、今後とも私は医学と理工学の接点に飛び込み、私の刀である多次元データ解析を使って計量診断・治療の研究を支えていくつもりである。また、未来の医学と理工学の創造の中核の一端を背う行動計量研究の活動を進めていきたいと日ごろ念じている。

[会報21号(1980)巻頭言、当時：理事・統計数理研究所、2005年逝去]



日本の農村社会学のリーダーの一人だった有賀喜左衛門氏が、村落構造を把握する数学はないかと言ってから、30余年になる。この質問の定義如何によって答は変わるだろうが、村落の計量社会学的な研究はいまだに数少ない。このなかで井森陸平氏が村落構造尺度を発表して、およそ25年が経つ。彼は、村落共同体の研究に関連のある旧習俗慣行を主とした項目を尺度分析で検討して、スケログラム2種類を示した。対象地は愛知県である。井森氏の尺度は多元分割表になっているので、潜在構造分析やログリニヤーモデルを適用するよい例題になる。

ところで、井森氏は三河と尾張について地域ごとの尺度を作り、愛知県全体の尺度を作らなかつた。これらの地域を知る人は、三河と尾張は分けて扱うのが適当であるという。地域による農村のちがいを無視出来ないからである。だが尺度作成のために井森氏が用いた標本集落は愛知県の無作為標本であるから、項目が同じ三河と尾張のスケログラムを合併したらどうなるであろうか。

結論としては、この合併スケログラムは愛知県農業集落を分類する尺度となり得たと筆者は考えている。その代り、たとえば、三河で旧習俗慣行が強い集落が、愛知県全体の尺度からすれば、旧習俗慣行の強い集落とみなされ、尾張で旧習俗慣行について強いとも弱いとも分類できなかった集落が、県全体の尺度ではいずれかに分類される。尺度を作る項目間の関連も、地域別データよりも県全体のデータの方が明確であり、三河・尾張の地域尺度とともに県尺度の方にも尺度としての意味があるように思える。

幾分これと似た話がある。農業集落カード（5年毎の農業センサスにおける農業集落調査結果を各集落ごとにカードとしてまとめたもの。全国で約14万の農業集落がある）からの標本について主成分分析を行い、その結果が実情を適切に反映しているかどうかを、筆者は知ろうとした事があった。このときは対馬を検証のための対象地とした。つまり、全国農業集落からの標本を規準として対馬農業集落それぞれの主成分得点を求め、これによって対馬の農業集落を位置づけたとき、この位置づけでおかしくないかどうかを、現地の見聞で確かめようとしたのだ。実情と合わないところもあると思っていたが、対象地の町で20集落のうち12集落の位置づけがおかしいということになった。その夜は、地元の人が遠路の調査を気の毒がって、位置づけの全部がおかしいと言わなかつたのではないかとすることも考えた。

大学に戻り、対馬農業集落だけの主成分分析を行い、その主成分得点をみると、地元の人々の対馬集落の評価と大体一致するし、このときの対馬集落の散布図は、全国農業集落からの標本を規準としたときの対馬集落の散布図と、原点はずれるものの、形は似ているようである。どうやら現地には対馬規準ともいべきものがあって、全国的な標本を規準とした場合とは、ちがった集落の位置づけが行われると解したらどうかと思うようになった。

同じ農業集落のデータでも、地域レベルで扱うか、もっと広いレベル、ときには全国レベルで扱うかによって、何がどう違ってくるのか、このとき地域差（個体差といってよいと思うのだが）をどう扱うかは、筆者の関心事のひとつになっている。

[会報41号 (1987) 巻頭言より、元理事]

## 日本行動計量学会での活動

狩野 裕

大阪大学大学院基礎工学研究科

私が日本行動計量学会に入会させて頂いたのは、確か1992年ではなかったかと思います。それまで日本数学会と日本統計学会を中心に活動していて、日本行動計量学会は少し遠くから眺めていました。ところが、いつしか狩野にとって活動の中心学会として位置づけられていきました。1993年の大会は大阪大学人間科学部で開催され、そのとき、初めて特別セッションを組ませて頂きました。セッション終了後フロアにおられた脇本和昌先生（岡山大学）からナイスセッションとの賛辞を頂き嬉しかったのですが、それはリップサービス以外の何物でもありませんでした。それを今でも記憶していますのは、その日の夜、脇本先生がホテルでお亡くなりになったからです。本学会としても貴重な人材を失いました。また、当大会の第3日目が台風の接近によって中止に追い込まれるというハプニングもありました。

1994年に当時の編集委員長であられた繁榊算男先生からお誘いを頂いて欧文誌 *Behaviormetrika* の編集委員を務め、Covariance structure analysis の特集号を担当させて頂きました。その貴重な経験が、後年に同雑誌の編集委員長を拝命したとき、大いに活かすことになりました。

狩野は1997年に人間科学部に異動しましたが、それからは以前にもまして同学会は狩野にとってきわめて中心的なものとなりました。それは、同学部での所属が行動計量学研究分野であったことや同年に優秀賞を頂いたことも関係しているかもしれません。1999年に第2回春の合宿セミナーの開催責任者の指名を頂きました。大阪大学を会場とし、結果的に200余名の参加者を得たのには感激しました。その後数回に亘って、合宿セミナーの講師として主に因子分析や構造方程式モデリングについて講義をさせて頂きました。

2001年に当学会と関係する計量心理学会国際大会（IMPS2001）を大阪大学で開催させて頂いたのは貴重な経験でした。組織委員会の中心メンバーは柳井晴夫先生（大学入試センター）、岡太彬訓先生（立教大学）と繁榊算男先生（東京大学）でした。狩野は数名の大阪大学の助手とで開催地組織委員会を組織し、学生の力を借りて大会運営をしましたが、若気の至りと言いますか、今考えるとこのような大きな仕事を引き受けたのは無謀であったと思います。IMPS2001ではTシャツをデザインし販売しました。タコティーと称されたTシャツはほぼ完売し、2年後に地中海のサルディニア島で開催されたIMPS2003でタコティーを着用した参加者がおられて大いに盛り上がりました。

日本行動計量学会の特徴は、何と言っても、統計科学者が社会科学や疫学を含む多くの分野の統計ユーザまたはそれに近い研究者や実務者と直接的な対話ができることでありましょう。統計科学を科学の方法論とみたとき、方法論者と統計ユーザとのコミュニケーションは重要な要素です。この観点で、木下富雄先生（京都大学）の統計ユーザ・メーカー論からも強い刺激を受けました。

日本行動計量学会が発足した1970年代は多くの学会・協会が誕生した時期でもありました。その中でも同学会は優良学会と言っても良いのではないのでしょうか。学会員は800名を超え、たとえば、国際的な学会である Psychometric Society のそれよりも多いと思ひ

ます。その理由は日本行動計量学会が統計ユーザにとっても魅力的な学会であるからだと思います。先に登場した木下富雄先生は同学会の大会を「統計手法のデパート」と呼んでおられます。学際性や文理融合は時代のキーワードですが、それを35年前に先取りしたのが日本行動計量学会と言えると思います。(本文で登場した方々の所属はすべて「当時」である)

[理事、1997年度(第12回)優秀賞受賞]



## 日本行動計量学会との関わり

佐井至道  
岡山商科大学経済学部

日本行動計量学会35周年、おめでとうございます。個性的な学会として存在意義を持ち、さらに発展していくことを祈念いたします。

岡山大学教養部の教授を務められていた脇本和昌先生が、岡山での第17回行動計量学会大会の開催を引き受けられたのが1989年夏でした。その頃、私は岡山商科大学に講師として勤めていましたが、同時に岡山大学大学院自然科学研究科（博士課程）にも通わせて頂くという幸運に恵まれ、脇本先生の指導を受けていました。脇本先生は私にデザインの才能があるという、とんでもない誤解をしており、大会の予稿集の表紙に岡山らしいイラストを描くことを命じられました。数日の期間しかなく、訳も分からないままに、当時完成したばかりの瀬戸大橋（児島 - 坂出ルート）を描きましたが、今でもその予稿集を目にすると顔から火が出る思いです。この大会への参加を機に入会したこともあり、これが私と行動計量学会との最初の出会ということになります。

その脇本先生は1993年に突然他界されてしまいました。研究についてのアドバイスを受ける機会が減ったそれからの数年間、私の研究にとって最も苦しかった時期でしたが、その頃、私は「行動計量学」に次の3編の論文を投稿しました。

### サンプリング法の誤解による推定への影響について

- 第1部母平均推定の場合（第20巻第2号）
- 第2部母分散推定の場合（第20巻第2号）

### 層化抽出法に基づく母平均の信頼区間の構成について（第23巻第2号）

内容がオーソドックスなサンプリング理論に関するものだったため、周りに専門の研究者も少なく、十分な議論を交わせないまま投稿しなければなりません。修士時代の恩師である田栗正章先生にご相談したところ、迷わず行動計量学への投稿を勧められました。調査関係に強い行動計量学の選択はごく自然だったと思います。実際、レフェリーの方々からは対応に困るほどのコメントを頂き、実に多くの勉強をさせていただいたと感謝しています。もちろん今にして思えばという意味で、当時は分厚いコメントに多少落ち込みもしました。そのことが評価されたのかは分かりませんが、2001年の第29回大会で優秀賞を頂きました。

1996年頃からは、官庁統計の個票データを公開する場合のリスク評価法と秘匿方法の研究に取り組んでいます。得られた手法は官庁統計のみでなく、社会調査などで得られた個票データに対しても応用できます。そこまで手が回らないのが現状ですが、今後は微力ながら、そのような方面でも日本行動計量学会に貢献していければと考えています。

[2001年度（第16回）優秀賞受賞]

## 日本行動計量学会第24回大会のこと

宮 埜 壽 夫

大学入試センター研究開発部・千葉大学名誉教授

第24回大会は、千葉大学担当ということで、幕張メッセで開催されました。大学内ではなくメッセで開催となったのは、日本統計学会大会との合同開催のためであり、参加人数の大幅な増加が見込まれたためと統計学会の大会への参加者が多いためです。大会は、1996年の9月7日～9月9日に開催されましたが、大会前日には統計学会と合同でチュートリアルを開催しました。チュートリアルセミナーは、大会でも講演をいただいたDarrell Bock先生（シカゴ大学）、甘利俊一先生（理化学研究所）にお願いしました。また、幕張メッセを使用するには、一般公開の講演等の開催が望ましいとの話があり、竹内啓先生、故林知己夫先生にそれぞれ「21世紀の展望 - 歴史的予測と数量的予測」、「行動計量学とデータの科学」と題してご講演をいただき、さらにパネルディスカッション「21世紀の社会と人間 - 科学的手法による予測はどこまで有効か」を開催しました。一般の方がどれくらい参加されたかは不明ですが、パネラー、講演者は錚々たる顔ぶれであり、統計学会との合同開催という利点を活かしたよい催しであったと思っています。行動計量学会独自の催しとしては、招待講演2件（Bock教授、Browne オハイオ大教授）、特別セッション11、一般セッション8が開かれ、発表件数は115件であった。

当時を思い起こしてみると、大会の開催を千葉大学で引き受けること、大会委員長を私がやること等、すべて私が在外研究でマルセイユ大学にいた間に決められており、そのことを伝えられたときには愕然としたものです。しかし、千葉大学の講座の同僚はもとより、田栗先生（当時、千葉大学理学部、現大学入試センター試験・研究統括官）、朝野先生（首都大）、繁樹先生（東京大）、岡太先生（多摩大）を始め、多くの先生にお世話になり、何とか大会を無事終えることが出来ました。今も感謝の念に耐えません。特に、開催に必要な資金を工面するために、広告掲載のお願いに尽力をいただいたこと、セッションの司会を無理にお引き受けいただいたこと等が、記憶によく残っています。

他学会との合同開催は大変ではありますが、学会の活動をより活発にするにはよい手段であると思います。最近ではIMPSがありますが、より一層、他学会との交流を深められたらと思います。

[第24回大会実行委員長、1987年度（第2回）優秀賞受賞]

## 「行動計量学会誌」編集委員長時代の思い出

久保 武士  
龍ヶ崎済生会病院

他学会誌の編集委員を務めたことはありましたが編集委員長を拝命したのは行動計量学会誌が始めてでした。身に余る大役でしたが、その間随分勉強をさせて頂き考えさせられることが多々ありました。

まず何よりも印象的だったのは2人の査読者のうち少なくともお1人は不採択という厳しい判定が多かったことです。主として方法論に関する疑念からの却下判定でした。極めて広い領域からの投稿であり、統計学的手法に習熟していない投稿者もいて、もう少し専門家のアドバイスを受ければ良かったのに、と思われる着想の良い論文もありました。

後にノーベル賞受賞対象となった研究論文もその領域の嚆矢となる研究は、しばしば先駆的研究にありがちな瑕瑾を咎められ、一流ジャーナルに掲載を拒まれたことが少なくなかったと聞きます。

査読者は投稿者にとって最高裁判事のような立場にあり、投稿者には採択してもらうために（無罪を勝ち取るために）控訴と言う手段がありません。

勿論編集委員会では査読結果を基に慎重に審議をして最終結論を出すのですが、不採択の結論にはいつも心理的な抵抗がありました。死刑の判決にも似て全員一致が原則でした。救済の余地があれば差し戻しで、修正し再度査読に委ねることが多かったと思います。

査読をしていると自分にはこの論文を正確に理解するだけの知識や能力に欠けているのではないかと、論文の著者は自分より遥かに高いレベルにいるのではないかと、言う懼れに近い気持ちを時に抱くことがあります。査読者は限りなく謙虚であることが求められる所以です。

一方論文のクオリティを高く保つためには甘い査読が赦されないことも疑う余地がありません。何千何万という多くの会員を擁する学会でありませんから、つまりささやかな学会ですから学会誌の学術的価値は絶対に低めてはならないと思いました。山椒は小粒でもピリリと辛い学会誌であって欲しいという願いからです。

査読を巡って愚痴めいたことを記しましたが、厳しい査読を通過した論文はそれなりに優れた論文と思います。

コンピュータがこれほど発達した時代において、行動計量学はもっとその裾野を広げ一層発展できるはずです。そのためにも行動計量学会誌はもっと広く distribute されるべきでないでしょうか。

最後に私の編集委員長時代に編集委員を務めて下さった方や査読者の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。随分不躰な催促をしましたが、査読の綿密さ、緻密さにはいつも尊敬の念を抱いていました。

今は亡き林知己夫先生の衣鉢を次ぐ優れた後継者が大勢おられるのですから、行動計量学が更に発展することは間違いないと確信していますし、そうなることを心から祈念しています。

[第22回大会実行委員長、元和文誌編集委員長、2005年度（第20回）功績賞受賞]

## 日本行動計量学会35周年に寄せて

林 文  
東洋英和女学院大学人間科学部

大学卒業以来、研究者になろうとは思っておらず、下働きとして何か役に立ちたいとだけ思ってきました。林知己夫先生とそして行動計量学会は、何とか学界の端くれにおいていただくことになった私にとっての重要な基盤です。統計数理研究所で林知己夫先生の研究室に置いていただくことになってから、大変広い分野のご研究とそのアプローチに引き込まれたのは、行動計量学の設立に携われた諸先輩と同じような気がします。林先生は、とにかく、何でも面白くて仕方がないというように取り組まれていました。昼休みを延長してそんなお話を随分沢山お聞きすることができました。そこでお話されていたことが、そのうち文章になっていて、雑談のようなお話をお聞きする時間は、私たちにとってはもちろんですけれども、話しながら考えておられたのかな、などと思います。

さて、行動計量学会にはそんなわけで最初から入会させていただいたわけではありません。林先生はお手伝いの私にも論文の一部を担当させて下さり、ご指導下さいました。その中で、データの見方というものが身についたようです。統計数理研究所という世界から外に出たとき、そうして身についたものが、実はとても重要なものだ気付かされました。それが、たぶん行動計量学だと私は思っております。はじめは林知己夫先生が常に見てくださるという状態のまま、行動計量学に発表させていただくようになり、学会運営についてのお手伝いもさせていただくことになりました。

「行動計量学」の編集委員長をピンチヒッターとしてお引き受けし、次の1期も担当させていただきました(2000年10月~2003年3月)。丁度、投稿原稿を紙ベースから電子媒体に変化する時期でもあり、原稿は書留でという考えと電子メール添付でよいという考えがあって中途半端のまま、その他いろいろと不手際もあり、出版の遅れを回復させることはできませんでした。しかし、特集企画など、行動計量学会を愛する編集委員や執筆の先生方のご協力を得て、よい特集号を出版できました。吉野諒三氏によって手続きが簡略化されたのはすばらしいことだと思います。

2002年には林知己夫先生を失い途方にくれましたが、行動計量学会は、他の学会と比べて、大会発表をはじめ様々な面で、自由な学問の雰囲気を持っています。今の厳しい社会で、それが失われないようにと思います。

[理事、元和文誌編集委員長]

## 運営委員会活動と行動計量学会

山岡和枝

国立保健医療科学院技術評価部

2000年度から2005年度までの6年間、運営委員長をお引き受けした。運営委員会は行動計量学という学際的な分野を考慮して、多岐にわたる分野から15名の方々に運営委員をお願いし活動を行ってきた。その役割はセミナー、シンポジウム、講習会等の企画運営、広報理事とともに会報の発行・WEB運営（その当時はまだ広報委員会は独立していなかった）など、学会活動の活性化に向けて取り組むことであった。また、研究部会として地域部会と小グループ研究会の援助を行い、それぞれ大会はもとより、独立した形でのシンポジウムなどを展開していただいた。

当初の委員会では、繁樹先生や岡太先生のように学会活動を率先して率いてきてこられた頼もしい方々を筆頭として、それぞれの委員が積極的にかかわり、特に依頼しなくても自発的に、シンポジウムをはじめ、セミナーや講習会を開催して下さっていた。また、初めての試みではあったが、海外の研究者による講演会の開催や、社会調査士教育における多変量解析の講習会を共催という形で行ったこともあった。さらに、行動計量学という基礎から応用までの幅広い分野での研究に従事する、あるいはしていこうとする若い人々（自称も含む？）を対象として行ってきた合宿セミナーを、毎年春に開催してきた。これらはすべて運営委員や会員のボランティアにより行われてきた活動であり、運営委員会はこれらの活発な活動の一助となることができたと思う。

このような6年間を通して特に印象の深かったのは2002年のシンポジウムである。この期間には第68回～第86回まで計19回行い、2002年度には6回のシンポジウムを行った。特に5月8日に統計数理研究所にて開催した第73回行動計量学会シンポジウム「データの科学と調査法」では、「データによって現象を理解する」という林知己夫先生の一貫した探索的立場に基づく「データの科学」についてお話いただいたが、8月6日に亡くなる前の最後の講演となってしまった。また、次の6月1日の「データの科学と調査法（その2）」には、コメンテーターとしてご参加いただいたが、健康状態があまり優れなかったにもかかわらず、そのような気配を感じさせずお話いただく姿が印象的であった。このようなすばらしい諸先生方が発展させてきた行動計量学会が35周年を迎えたことを機に、今後さらに活発化し学会活動を深めていくことが現在の会員であるわれわれに託された課題であろう。

[理事、元運営委員長、2003年度（第18回）優秀賞受賞]



1994年に統計数理研究所に就職した時、ちょうど本学会も役員改選期で、柳井晴夫先生が理事長に就任された。4月中のことだったと思うが、柳井先生から直々にお電話を戴き、行動計量学会の運営委員を務めて欲しいと言われ、一も二もなくお引き受けした。当時千葉大学の田栗正章先生（運営委員長）に紹介いただき、私の学会活動を支援する側の活動が始まった。またこの期から統計数理研究所のメンバーが事務局（庶務担当理事）を務めるようになり、それが現在も続いている。爾來14年、運営委員会や広報委員会の活動と事務局の仕事のインターフェース的な仕事も手伝ってきた。考えてみると現職場への勤務期間と学会の支援活動の時期が丁度重なっていることになる。

最初のお手伝いは、丸山久美子先生が企画された行動計量シンポジウム（生と死の行動計量）の会場係だったと記憶する。この時は改選時期に重なったこともあって広報が十分になされずに、開催されることを知っていた会員が大変少なかった。必然的に参加者も少なく、丸山先生を落胆させてしまったことを覚えている。現在では運営委員会と広報委員会の連絡は比較的密に行われ、いろいろな催しのアナウンスなどもタイムリーに行われているが、ひとつの要因として2003年以降に広報委員会を運営委員会と別に常置委員会としたことが効を奏したと思う。14年間で、自分で企画した行動計量シンポジウムなどもあったが、積極的に学会の成果となるような運営委員会企画を立ち上げられたかという点心許ない。

運営委員会の活動で少し印象に残っているのは、春の合宿セミナーに関する件で、発端は私の発言だったかも知れない。繁榊算男先生と岩崎学先生が合同でゼミ合宿を開催されている（本当に合同だったかちょっと自信がありません）というお話を委員会会合の前か後かに伺い、「私も参加したい、楽しいだろうなあ、何なら公開合宿にしていただけませんか」、というようなことを軽い気持ちで申し上げたところ、その類の催しに繁榊先生が大変乗り気になって下さった。あれよあれよという間に第1回の開催が決まった覚えがあるが、何しろ短期間に充実した催しを準備された繁榊先生以下、ゼミの皆様のバイタリティーに心底感嘆した。といいながら実は私にとってはあまりタイミングの良い時期とは言えず、残念なことに、この時を含めて一参加者として参加できた合宿セミナーというのではない。

活動を通じて感じるのは、学会活動がバイタリティー溢れる諸先輩のサービス精神に支えられているということなのだが、これは本学会らしいところとも思えるし、続く者にとっては高い目標値を設定されているようで苦しいところでもある。若手会員の小さなやる気と学会支援活動への気楽な参加の気運を盛り上げられたら良いのだが、とたまたま思案している。

[理事、2000年度（第2回）奨励賞受賞]

## 「同じ釜の飯を食う」春の合宿セミナー

大森拓哉  
多摩大学経営情報学部

私がこの学会に入会してからすでに10年以上もの時がたっていると考えると感慨深いものがある一方、まだまだ研究面においては諸先生方にとっても太刀打ちできない情けなさを改めて感じるものである。初めて大会で発表した際にも、行動計量学の専門の先生方からどのような厳しい質問・指摘を受けるのだろうかと思いきや、ビクビクして登壇したことを今でも鮮明に覚えている。事実、発表中に首を横に振って全否定するような仕草をする先生がおり、大いに緊張が増した思いがある。そのような行動計量学を専門とする大先生方に少しでもお近づきになれる機会を与えてくれたのが春の合宿セミナーであった。

大学院生だった当時幸いにも第1回（千葉・検見川）の開催のお手伝いをする事ができたため、多くの参加者や、講師を務めてくださる学会の大先生方のお顔を拝見することができた。また、第2、3、10回は参加者として、第7、8、11回は実行委員として、第6回には講師として参加し、多くの方々と交流を深めることができた。これは単なるセミナーではなく、“合宿形式”というある種無理やり同じ時間・空間を共有する（させられる）ことからくる良い面での効用であると思われる。方や、相部屋しか用意できなかったり、合宿施設そのものを用意できなかったりといった、参加者のニーズ全てを満足させられない面があるのも事実である。直近の第11回（多摩大学）では合宿施設が用意できなかったため、無理やり参加者の方々には学食で同じメニューを食べていただいた。それらを踏まえたうえでも、合宿セミナーを通して学びを得ることはもちろん、多くの方々と交流する機会が得られたことは私にとっては大変大きな収穫であった。

通常の大会では興味のある発表セッションに参加するのが普通で、大会最初から終了日最終セッションまで全てに参加する方は少ないと思う。それに対し、この合宿セミナーはかなりの長時間を参加者が共に過ごすことになる。異論もあるが、同じ時空間をもつことによって参加者同士の距離が縮まるであろうことは些か期待しすぎであろうか。実際第1回の際には夜に皆で海に出かけたり、実現はしなかったがテニスやバーベキューなどの案も出たりしていた。そのときの集合写真に写っている若手（だった？）参加者達が、現在各方面で活躍していることを聞くと大いに刺激にもなるものである。第2回の大阪大学（狩野先生）の際のサブテーマは「ともだち100人できるかな？」であったと記憶している。参加者が40名程度のときもあれば200名を超えることもある合宿セミナーではあるが、ぜひとも多くの方が参加して、学術面だけではない「交流」を深めていただきたい。さらに願わくば、いつかは雪の降る温泉宿とか、3月でも暖かい沖縄とか、あるいはちょっとがんばってハワイとかで開催していただきたいと思うものである。

[運営委員]

## 「シンポジウム担当」運営委員として

松本正生  
埼玉大学経済学部

ここ数年来、行動計量学会には運営委員として参画させていただいている。ただ、学会への貢献度は極めて低く、調査関連のシンポジウムの企画運営で辛うじて責任を果たしているに過ぎない。どうかご寛恕願いたい。

松本が企画および実施にかかわった行動計量学会主催のシンポジウムは、4件に及び、その内容は以下の通りである（年次順に、タイトルと報告者・討論者を列挙する）。

「電話世論調査：RDD法の検証」（01.10.20）

報告者 齊藤博美（朝日新聞社）、小寺敏雄（NHK）、土屋隆裕（統計数理研究所）

「世論調査のゆくえ」（02.11.23：多摩大学と共催）

報告者 宮森重光（共同通信社）、長江一平（毎日新聞社）、松田映二（朝日新聞社）、  
窪田知久（読売新聞社）

討論者 山岡和枝（国立保健医療科学院）

「今こそ、調査の哲学を」（04.5.22：多摩大学と共催）

報告者 松田映二（朝日新聞社）、吉野諒三（統計数理研究所）、萩原雅之（ネットレイ  
ティングス）、相田真彦（ミシガン大学）

討論者 平野浩（学習院大学）、山岡和枝（国立保健医療科学院）

「いま求められる調査とは 各調査モードの比較検証」（06.11.11）

報告者 佐藤寧（日経リサーチ）、福田昌史（毎日新聞社）、松田映二（朝日新聞社）

討論者 谷口哲一郎（輿論科学協会）

司会はすべて松本が担当。なお、4番目の「今求められる調査とは」における報告の担  
い手となったサーベイ・メソドロジー研究会は、2006年度から行動計量学会の研究部会  
として活動している。

これらのシンポジウムは、もとより多くの先輩のみなさまのご協力なしには成立しなかつた。また、いずれも非常に盛況であった。心より感謝を申し述べたい。

「電話世論調査シンポ」時（2001年）には、RDDにかんする懐疑論が主流を占めており、この方式の学問的および社会的認知度を広げるべく配慮した記憶がよみがえる。RDDは、その後急速にシェアを拡大し、世論調査の標準となるに至ったが、直近ではもはや、その限界すら語られるようになってしまった。この間、わずか数年にすぎない。社会との共生を余儀なくされる社会・世論調査の宿命であろう。

[運営委員]

## 会報の編集を担当するようになって

西川 浩 昭

日本赤十字豊田看護大学

準会員の期間も含め、日本行動計量学会に入会して20年以上になる。学会が創立35周年ということから鑑みると、会員歴は長い方になるのかもしれない。現在、いくつかの学会の会員であるが、この学会は私が初めて入会した学会である。また、その年の夏、北海道大学で第13回学会大会が開催された。夏の北海道という言葉にも釣られ、この大会に参加したが、これも私が参加した初めての学会大会である。学会というと格式張ったイメージがあり、ネクタイ締めてスーツを着ていくものと思っていたのだが、参加者がラフな格好をしていたのに驚かされたのを覚えている。その後20数年間、学会大会には結構参加しているが、自分の研究は主に医学系の学会で発表しているため、この学会ではあまり発表した記憶はないが、私としては繋がりが深いと受け止めているとともに、思い入れが強い学会である。

現在は、広報委員会の会報担当と本誌こと記念誌編纂委員会の委員という出版物による学会の広報活動を担当している。とくに会報については編集の責任者を担当している。いつも巻頭言をどなたに依頼したらよいかと頭を悩ませている。そこで思うことは、この学会の会員が如何に多方面にわたっているかということである。これは学会としては好ましいことであるが、原稿を依頼する者としては悩みの種である。特定の領域に偏らないようにした上で、執筆を依頼する人を探すのは結構苦労する。

私が担当するようになってからの巻頭言に限って見れば、最も多いのは林知己夫先生についての思い出であるが、その他の内容としては、理論統計、調査、医学、統計教育、と様々なテーマの原稿を掲載させてもらっている。私が担当する前を振り返れば、前述の内容以外に、言語、法律、意思決定、計算機など挙げだせばきりがない。ひとつの号にひとつしかない巻頭言でさえこの状況であるので、関連学会の開催案内にいたってはバラエティの限りである。本学会がいわゆる境界領域に位置し、人間の行動が多様であることを考えれば当然の事かもしれないが、このように様々な領域の研究者が一同に集まっているのは非常に貴重なことであると言えるだろう。

今後は、本学会がこのような多領域の研究者が一同に集い、互いに交流を深める場として機能していくことを願うばかりである。

[理事]

本学会に入会したのは1997年。学会の35年に比べて、在籍は長くはありませんが、いくつかのお手伝いをさせてもらう中で、私にとって身近でかわりの深い学会となりました。

まず、岡山・倉敷で行われた第27回大会（1999年9月20日～22日、垂水共之委員長）。少し離れた2つの会館が会場でしたので、倉敷美観地区内で迷わないように、あるいは懇親会で倉敷を存分に楽しんでもらえるようにと、参加者へ丁寧な配慮をしたことから、こういった雰囲気をもった学会なんだ、と感じたことを覚えています。次に、「地域部会」。2002年に、それまでの小グループ研究会を発展させ、「研究グループ」と「地域部会」の2つが新設されたのを受け、この後者に、「行動計量・岡山地域部会」を申請しました。2002年度から4年間、代表としてお世話をさせていただきましたが、2回の行動計量シンポジウム（第79回「地域・地理・図形情報とデータ解析」と第85回「社会調査と社会調査士」）や研究奨励を目的とした「学生セッション」を含め、4年間で計18回の研究会を行うことができました。年5万円の助成金やノルマ（年4回の研究会と2年に1回のシンポジウム開催）が、実は、定期的に研究会を開催する非常によい動機となりました。岡山はもともと統計の研究者の多い地ですが、研究会での新しい出会いやシンポジウムにも各地から参加をいただき、東京近郊以外の「地方」での研究活動を活発化しようという「地域部会」の趣旨とこれを制度化した本学会の英断に大いに感謝した次第です（現在も、世話人を交代し、活動を継続中です）。

さて、2006年度からは、広報委員として、会報とともに、ネット関係の仕組みの充実にかかわらせてもらいました。ひとつは、会員用のメーリングリスト（ML）で、書式を統一し、学会からのお知らせや関連団体からの情報をタイムリーに伝えるように広報委員でがんばっています。最近では、ML配信を前提とした連絡がたくさん来ますので、もっとMLへの登録者が増えてほしいところです。また、Webページも2006年9月から新しいデザインで運用しています。特に、Webページにすべての情報を集中させようと、会報、大会プログラム、行動計量シンポジウムの開催要項などを第1回からすべて掲載することにしました。これには、関係者の多大な協力によって、故林知己夫先生の資料庫内の資料や柳井晴夫先生所蔵の資料から情報収集をしました（ここで整理した情報が、この35年史の「資料編」の基となっています）。2007年9月から公開していますが、作業を終えて、それらの資料をあらためて眺めてみると、当時の様子や研究動向がわかるだけでなく、創設時の苦勞の一方で先人の先見の明がどれほど素晴らしかったかをあらためて知ることができます。

理論だけでなく、実学的な研究をしっかりと受け止めてくれる日本行動計量学会、もっと会員が増えてもよいな、と思います。また、どんどん便利になるネット環境に本学会および会員も遅れないようにしなければ、とも感じます。先人の資産を受け継ぎながら、ますますの発展を期待するとともに、今後も可能な限りお手伝いをしていきたいと思っています。

[理事、広報委員長]



## 日本行動計量学会35年記念誌編集に携わって

森 本 栄 一

株式会社ビデオリサーチ 研究開発部

日本行動計量学会に入会したのは1995年の秋頃になります。当時、大学院生でしたが、学部時代より、統計数理研究所の駒澤勉先生の研究室で勉強がてら働かせて頂くことになり、先生の所に持ち込まれるさまざまな仕事を通じて、実際のデータによる問題解決のための統計的データ解析（行動計量学）に興味を持つとともに、駒澤先生のご著作（『数量化理論とデータ処理』（朝倉書店）や『数量化理論』（放送大学教育振興会））の冒頭に紹介されていた数量化理論の成立過程について非常に興味を抱きました。統計数理研究所の図書室には、林知己夫先生の数量化理論開発当時の論文や当時の時代背景を探る統計学関係の古い資料が豊富にあり、駒澤先生のご許可を頂きこれらを収集するとともに、幸いにも、同じ頃林先生が東京工業大学で講義「行動計量学序説」をなさっており、講義の後、先生に相談を持ちかけると初めて会う私に優しく接して下さい、以後、先生から貴重なお話をお伺いできる機会を得ました。

林先生には、細部に渡って論文にも目を通して頂き、後に「戦後日本の統計学の発達 - 数量化理論の形成から定着へ」というタイトルで、『行動計量学』（32巻1号）に発表いたしました。ここでは、数量化理論が開発された1940年代後半から学会が設立された1973年までの時期（時代区分）を対象とし、理論形成からその定着過程について分析しました。さらにこの論文で、その年の夏の大会で肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）を頂くことができました。

論文以外にも、林先生には先生の渋谷の事務所で毎月開催されていた「林塾」にも参加の機会を頂きました。「林塾」では、林先生を始め、岩坪秀一先生、丸山久美子先生、林篤裕先生、倉元直樹先生、伊藤圭先生などが参加されており、先生方の統計・調査に関するさまざまな研究報告と議論の中から行動計量学の礎を学ばせて頂くことができました。これら林先生に渋谷の事務所で論文についてご指導頂いたことや、「林塾」での議論、また先生が渋谷の事務所にいらっしゃる際、ベレー帽とタートルネックで事務所の前の急な坂道を上がられてくるお姿などが脳裏に蘇ります。

その後、日立製作所を経て、現在、会社設立当初から林先生が顧問として調査の基礎を築いたビデオリサーチにて、日々、さまざまなメディアリサーチ・マーケティングリサーチの研究課題に取り組んでいます。今回、学会の設立メンバーでその後も中心的存在でいらっしゃる柳井晴夫先生の下で35年記念誌の編集作業に携わることができ、当時の貴重な状況を知りえるのみならず、先生と学会の歴史を纏める仕事をさせて頂くことができたことを感慨無量に思っております。これも天国の林先生が下さった貴重な機会と感謝しております。

[35年記念誌編集委員、2005年度（第7回）奨励賞受賞]

私が統計数理研究所に研究員として採用されたのは、林知己夫先生が統計数理研究所の所長になられた1974年4月である。就職して1年目か2年目かは定かでないが、駒澤勉先生に勧められて行動計量学会に入会した。行動計量学会が1973年9月の発足であるから、かなり古い会員ということになる。林知己夫理事長のもと、水野欽司先生、駒澤勉先生が行動計量学会の仕事をしているのを、時にはお手伝いをする程度の関りはあった。駒澤先生が水野先生の代行で事務局をしたときではないかと思うが、私の研究室が比較的広い部屋であったためか、ある日突然、駒澤先生がダンボール箱と一緒に若いアルバイト女性を連れてきたときは驚いた。学会の事務についての当時の私の認識は、一人のアルバイトと小さな机と名簿の入ったダンボール箱である。

国立国語研究所で開かれた第10回大会（1982年8月）では、実行委員としてお手伝いをした。10回記念ということで、日経ホールで記念公開講演会が開催された。司会は野元菊雄先生で国語研究所の林大所長、と林知己夫先生が講演者であった。

それから約20年後、2003年度から2005年度の3年間事務局をお引き受けした。理事長は杉山明子先生である。この間は行動計量学会にとって様々なできごとがあった。中でも学会にとっての一大事は、会員業務と各種発送業務を委託していた（財）学会事務センターの突然の破産である。2004年8月のことである。会費預かり金、約300万円が回収の見込みがないことになった。幸い、文科省から和文誌発行に対する補助があり、運営上は事なきを得たが、肝を冷やすできごとであった。

発足当時と最近の学会の大きな違いは他学会との関係である。2003年11月に日本教育社会学会、日本行動計量学会、日本社会学会の3学会によって、社会調査士資格認定機構が発足し、現在は法人化に向けて様々な動きがある。2005年2月には、行動計量学会を含む統計関連6学会による統計関連学会連合が発足した。また、この間、横断型基幹科学技術研究団体連合への加盟、日本心理学諸学会連合からの脱退など、対外的な交渉ごとが大幅に増えた。会員への直接的なサービス以外に社会への貢献とも言うべき業務が増えている。社会との関りも含めて学会のあり方を見直す時期が来ているように思える。

[理事、前事務局長]

## 『林知己夫著作集』の刊行

村上 征勝

同志社大学文化情報学部・統計数理研究所名誉教授

2006年の末に『林知己夫著作集』15巻が刊行された。先生はしかし、この著作集の完成を待たずしてお亡くなりになられた。先生には是非全巻を見ていただきたかったと今でも残念に思っている。

この著作集の刊行については、一度会報で案内させていただいたが、今回は編集の経緯と刊行後のことについてご報告させていただきたい。

先生の著作は、著書、論文、研究報告、随筆、新聞記事、書評など1500編を超え、しかも分野は多岐にわたっている。これらを個人で集めるのは、不可能に近い。そこで、先生の現象理解に関する考え方や、データ分析に関する思想・哲学を理解する上で重要なものを集め、著作集を作らせていただきたいと先生にお願いした。それは体調を回復された先生が久しぶりに研究会に来られ、「これからだ」とおっしゃられた2002年の春であった。「生涯現役」を標榜されていた先生のことなので、許可は得られないと思っていたところ、意外にも先生は少し考えられた後で「いいだろう」とおっしゃられた。

許可が得られた数日後、出版の打ち合わせのため勉強出版の池嶋社長とともに林先生のお宅に伺った。その折、巻数は8巻、価格は4万円で、作成部数は200～300セット程度で計画してはいかかでしょうかと申し上げた。勿論、最小限に見積もった場合の数字として申し上げたつもりであったが、後日、奥様からお聞きしたところでは、私たちが帰った後に、先生は奥様に「オイ、村上は（著作集は）あまり売れそうもないといっていたぞ」とおっしゃられていたとのことであった。これには自己の言葉足らずを大いに反省した次第である。

ところで、著作集は最終的には全15巻（4860頁）という大部なものになった。そのため8万円という高価なものになったが、作成した500セットの残部は現在20セットに満たないという状況であり、編集に携わった一人として大変うれしく思っている。

現在私は、林先生の提唱された「データサイエンス」をキーワードに教育を展開している文化情報学部には籍を置いているが、浅学非才の身でありながら、先生の行動計量学の思想と学問に対する情熱を、これからの時代を担う若い人々に伝えることが出来る立場にあることを、常に重く受け止めている。この学部の資料室、といっても10万冊が収納できる規模であるが、ここには奥様から御寄贈頂いた先生の蔵書が「林知己夫文庫」としてまとめられている。勿論『林知己夫著作集』も含まれている。

[第35回大会実行委員長、元事務局長、1997年度（第12回）功績賞受賞]